



—— 文樂座・吉田兵次聞き書き ——

吉田兵次

淡路淨瑠璃ばなし上

演藝コンクールとか、輕音樂とかの演出には司會者といふのがあつて、フロックコートとか、燕尾服とか、その他派手な服装でステージに現はれ、諧謔まじりで、演題や出演者を紹介し、演藝の進行に大切な役目と見られ、それだけに、やり甲斐のある仕事になつてゐるが、古典藝術人形淨瑠璃の方で、これに似通つた役目は「口上言ひ」で、ジョン・ジョンと祈が入つて幕が開くと、舞臺の上手に半身を現はし「東西一ツ、このところ××の段、相勤めまする太夫は××太夫、三味線××、人形は××出づかひにて相勤めまゝす。東

西一ツ、東西一ツ」と言ひながら下手へ退場する、と同時にデーン、デーンと三味線がひびき、淨瑠璃の恍惚を展開するといふ段どりになるのだが、この口上言ひは、いつも黒頭布と黒衣といふいで立ちだから、どんな人がやつてゐるのかお客にはわからない、その點、演藝コンクールや輕音樂の司會者にくらべて遙かに歩が悪く、やり榮えのしない仕事である。しかし文樂座には、このやり榮えのしない仕事を、しんぼろ強く奮に四十餘年間も續けてゐる人がある。それがわが吉田兵次師である。その點、山城少掾師、吉田文五

郎師らと共に、別の意味で文樂座の至寶と賞めてもいい存在であらう。そこで誌上ながら、兵次師に黒頭巾をぬいでもらつて、その素顔を出して彼自身の「口上」を言つてもらふことにした。(上田芝有記)

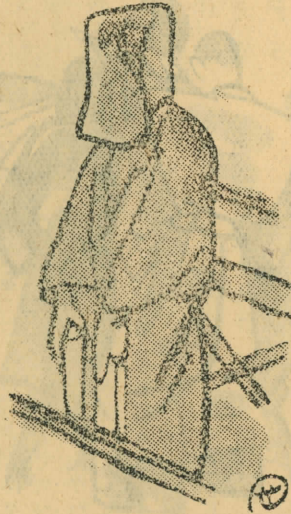
「私の在所は……」といふと、新口村の文句みたいですが、淡路でして、くはしう言ふと兵庫縣津名郡鮎原村で、本名は小林虎一と申します。年は、それを聞かれると辛うますが六十六歳になります。だいたいの私の村は淡路淨瑠璃の本場で、あんた狭い村だすが盛んなときは二十四座もありました。今はすつくりさびれてしまひましたが、それでもまだ四座残つてゐます。それで自然、太夫や人形遣ひになる人が多く、親代々これを稼業にしてゐる家がたぐさんあります。私の家でも祖父の小林高造時代からの人形遣ひで、親子五人ともこの道へ入つております。また口上の方でも「口上の萬吉」と言はれたほどの口上の名人も私の伯父です。いま文樂座で私と代り代り口上を言ふてる吉田萬次郎は、その萬吉の息子(といふても五十四歳ですが)で、私の從弟に當ります。それから御靈文樂座時



代に口上を言ふてゐた吉田紋五郎（本名濱田兼次郎）は私の實の兄でございませう。そういふわけで、私も十四歳の時からこの道へ入り小林六太夫座に勤めることになりました。

人形遣ひの修業は、今もなかなか樂ではございませんが、昔の修業ときたら、毒性なもんで、朝は早うから起きて庭掃き、拭そうじ師匠のお給仕から使ひ走りの雑用、それから小屋へお伴しても、始終師匠の身のまはりに氣をつけ、そして舞臺を勤めますが、ちよつとでも出來が悪いと、この大きな下駄で蹴りとばされます。御覽のとおり、古い人形遣ひの向脛には、たいてい、このやうな傷の跡があります。これが蹴とばされたときの傷跡です。そりや息の止まらぬほど痛うますが、齒を食ひしばつてしんぼうしました。しかし、その修業時代に近江源氏の八段目が出たとき背景に萬本といふて、たくさんならうそくに灯をつけて飾る仕掛けになつてゐました、その灯をつけるのが私の役目の一つでした。それが忙がしいので、つい師匠の下駄を出すのを忘れてゐました。そし

て「さあ、えらいことになつた」と、氣がついてあわてて下駄を持つて行きましところ、師匠はそれをはくと「下駄なしで人形が遣えると思うてたんか、馬鹿ツ」と言ふなり、横つ腹を蹴上げられました。それで肋骨が一本折れて、一週間ほど床に就きました。今の若い衆にこんなことをしたら、えらい問題になります



やる。しかし昔は、こんなつらい目に遇ふても、泣きの涙でしんぼうしたものです。芝居が果てて、くたくたになつて家へ歸ると、夜は夜で師匠のあんまです。しかし、このあんまは大變に修業になりました。と申しますのは「さあ、今日は三番叟のカゲを致へたる」といふ具合に師匠が膝を叩いたり、口三味線やらで

拍子をとつてくれますので、その通りの拍子で師匠の肩を叩きながら覚え込むのでした。

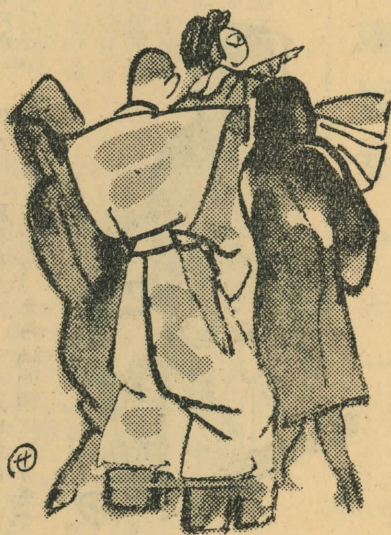
さて、淡路の人形淨瑠璃ですが、文樂のとはまたちよつた趣きがございまして、例へば人形のかしら一つにしても、文樂のにくらべますと大ぶりになつてゐます。それだけに目方が重なる勘定です。それから、内側のくり方を大きくくつて加減してあります。それから顔の塗りがへも、文樂では一興行毎に手入れをしますから、きれいですが、その代りにその度にかつらも取りはずして打ちかへます。ところが淡路の方は、一年ぐらゐは手入れをせずそのまゝ使ひます。と申しますのは、狭い村でたくさんの方元があるもので、村で常設といふやうなことは、とても出来ませんから、旅興行が主になつてゐて、毎年十二月の中ごろに村へ歸る例になつてをりますから、旅先では手のかからぬやうに、そして村へ歸つてから入念に修繕して、また來年いつばい使ふといふ仕組になつておりますから、胡粉なども厚い目に塗つて、丈夫に出来ております。文樂も戦災で人形がたぐさん焼けましたので、その補充に淡路



の人形もちよいちよい入つておりますから、氣をつけて御覽になるとお目につくことと思ひます。それから人形遣ひですが、文樂の方は文五郎はんや紋十郎さんは別として、その他の方々は立役でも女形でも兩方遣つておられますが、淡路の方はハツキリと専門になつておまして、私の家などは、みんな女形専門の人形遣ひといふことになつてゐましたが、私だけが男役を遣ふので、いはば例外でございます。

それから淡路の人形淨瑠璃の目立つた特色は大座といふて、道具立ての派手な仕掛けです。大座は例へば太閤記の七段目孫市切腹の場の紀州御堂さんの廣間、一の谷の陣屋で熊谷の出のところ、仙臺萩なら御殿場で榮御前のお出るところなど、時代物の御殿風のところになると、背景の襖を何枚も何枚も開いて、奥の廣いところを見せる仕掛けがあります。最も大仕掛けな大座は十八段返しなどといふのがあります。こゝろいふ場面は道具を見せるのが主でございますから、大夫の歌はなく三味線だけ

が、チンテン、チンテンと道具返へしメリヤスを續けてゐるのでございます。なにしろこんな大仕掛けな道具を持つての旅興行ですから大變で、牛車の二十四・五臺も連ねるといふさわざです。この頃のやうに雑用の嵩む時代では、そんな眞似は出来ませんから自然打ち絶えて



しもうて、あいさに一・二臺のトラツクに、ほんの形ばかりの道具を積んでまはるぐらゐで、昔の花やかなことは夢物語になつてしまひました。

しかし「昔の夢物語」とは申しますが大正時代までは、その面影が残つて

ゐたもので、その時分の旅興行先は主に紀州路で、淡路から船で紀州へ渡り、九度山、橋本、五條、下市、粉河などの町々村々をまはり、たいてい紀の川ぞひの河原の掛小屋で打つたものです。この旅先に着くと、町まはりとして、人力車を二十臺も三十臺も連らね、人形を飾り立て、出方一同もそれぞれ乗り組み、そのあとへ例の大座の道具を積んだ牛車二十數臺を連ねた長蛇の列で乗り込みます。また川乗り込みは、それらの一座が十數艘の川舟に分乗し、舟にはいづれも、まん暮を張りめぐらし、三味線や太鼓でにぎにぎしく囃しながら、紀の川を上るのでございます。すると土地の興行主の方でも、勇みの若い衆が、新しい印ばんでんに鉢巻といふ姿で、着飾つた藝者衆などを大ぜい連れて出迎えられる

す。そして興行先の町や村に着くと、「宵ぶれ」といふ、前宣傳をいたします。その時こそは、口上も暗れの大役で、行列の先登切つて、開演日藝題と木戸銭を書いたビラを持つて、「魚づくし」とか「鳥づくし」とか「青物づくし」とか、口合ひ交りの長口上を節おもしろく喋舌

り立てるのです。木戸銭といふても今から思ふと安いもので、當時は木戸が十銭、棧敷が四人詰で五十銭でございました。

なに、その口上をここで言へと仰言るのですか。弱りましたな、なにぶん長いことやりませんので、忘れたところも多し、それにこんな樂屋に座つて、あなたと「さし」で、まちめくさつては、どうにも調子が乗りませんから、うまく行きませんが、まあぼつぼつ、思ひ出しながら、やつつけてみませう。

芝居の評判、世上へどつと、タカの鳥、ワシは何にもシラサギなれども、天氣もこのほど續きに續いてヒバリなれば、道はだいぶん、トトトトンビぢやけれども、お辨は宥から趣向して、ヨタカ時分にメジロがさめたら、一番すんで二番鳥からムクむくと起きて、そのうちアヒルのやうにウズラ、ウズラとする人は、コウモリやコマドリ連れて、ハトからおいで、ワシはサギへ行きましよと、何でもカモの青首

さん方、ヤマガラ越してお越し下さりや、棧敷もシギや、朝はアケガラスから、御當所の木戸口さして、皆キジドリ、キジドリ

あしんど、どうやら行けました。これが「鳥づくし」です。この口上の合間にはカンカラ太鼓を入れて拍子をとるので、「魚づくし」は

芝居の評判ハリダコ、わしは何にもシラスぢやけれど、川の人氣タチウオで、ええとイワシのクチグチに、大けなコイでほめナマズ、明日はとうからコチも行かんか、オハゼも行こう。クデラにシヤチホコ、ブリにカツオやハモ、ハマチ、イカ、サバ首尾ようカレらがヒメヂを連れて、芝居見にイカナゴさんかと、皆クルマエビ、明日はとうから御當所の木戸にさして皆キスゴ、キスゴ

ほんの他愛もないものでございますが、こんな口上でも受けて、方々で所望されたりしますと、こつちはえゝ氣になつ

て、やつたもんです。こうして喋舌るうちに、私も何やら昔なつかしい氣になりましたから、もう一つ「青物づくし」もしやべらせてもらひませう。

芝居の評判タカナ、タカナ。朝トウガラシから、やぐらダイコのものにつけ、一にイチヂク、二にニンニク、サシ、酒に酔うたるニンジンまでが、芝居見にインギンマせんかい、そんなら私もイギスとキクラゲなれば、木戸口はソーメンのように、つる／＼とお通り下さりや、棧敷をシイタケ、元連中はフキ、ハンジョウ、まず、めでタケノコ、毎日芝居大入なれば、一つこゝらで、打つてくれ、しやん／＼ササギと手を打つて、皆さんのおいでをマツタケ、マツタケ。

(カットの寫眞は黒衣姿の吉田兵次師)